翻訳物としての『南伝大蔵経』

安岡孝一*

国立国会図書館が公表した『インターネット提供に対する出版社の申出への対応について』[1] を初めて目にした時、私は、どうにもこうにも納得がいかなかった。

> 『南伝大蔵経』(1935 年〜 1941 年、大蔵出版、全 70 巻) については、当分の間、インターネット提供は行わず、館内限定の提供を行う。

という結論は、さておくとしても、この文書には『南伝大蔵経』の著作権について何も書かれていなかったからだ。

> 『大正新脩大蔵経』の著作権保護期間が満了していることについては、同社も争っていない。

というアヤシゲな文章†はあっても、『南伝大蔵経』の著作権が現在どうなっているのかは、この文書では全く触れられていない。何とも気持ちが悪いので、少し調べてみることにした。

ためしに『南伝大蔵経』の第四巻 [2] を最初から順に読んでいくと、目次のページに翻訳者の名前が書いてある (図 1)。宮本正尊 (1893-1983) と渡辺照宏 (1907-1977) が、この巻の翻訳者とのことだ。本文には、著者や翻訳者は記されていないようだ (図 2)。一方、奥付には、大量の人名が記されている (図 3)。奥付でいちばん大きく書かれているのは、監修者の高楠順次郎 (1866-1945) だが、日本の一般的な図書目録規則であれば、この図書は

> 高楠博士功績記念会纂訳『南伝大蔵経』第四巻

というような形で「高楠博士功績記念会」を author として取ることになるだろう。ただ、それはあくまで目録規則がそういうものだ、というだけのことであって、著作権はまた別の話だと思う。

さらに、この『南伝大蔵経』第四巻の凡例 (図 4) を読む限りでは、この本には元ネタ [3] があるらしい。元ネタの方はパーリ語で書かれていて (図 5)、この本は日本語で書かれている (図 2) わけだから、まあ、パーリ語から日本語に翻訳したものだと考えるのが妥当だろう。元ネタの編集者は Hermann Oldenberg (1854-1920) だが、パーリ語の文章そのものの著者等は記されていない。

では、この『南伝大蔵経』第四巻の著作権は、どうなっているのだろう。少なくとも、元ネタのパーリ語の文章の著作権は、たぶん切れている。監修者の高楠順次郎の著作権も切れている。一方、翻訳者の宮本正尊と渡辺照宏の著作権は、もしそれが著作権として認められるものならば、2014 年の現時点では切れていない。

そのような状態であるにもかかわらず、最初に述べた国立国会図書館の文書 [1] の中には、宮本正尊や渡辺照宏など、全く登場しない。『南伝大蔵経』の他の巻の翻訳者 (附録参照) も、全く登場しない。登場するのは、著作権の切れた高楠順次郎だけであり、かなりミスリーディングというか、アンフェアな文書だということだ。

---

*京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター

†本当に争っていないのなら、この文書自体を国立国会図書館からではなく、第三者機関から出してもらうのがスジだと思うのだが、現実にはそうなっていない。

翻訳物としての『大正新脩大蔵経』

では、この国立国会図書館の文書 [1] における『大正新脩大蔵経』の扱いは、はたしてどうなのであろう。高楠順次郎を登場させるだけで、本当に著作権に関しては十分なのだろうか。

> 『大正新脩大蔵経』(1923 年〜 1934 年、大正一切経刊行会、全 88 巻) については、インターネット提供を再開する。

という結論なのだが、そこに至る議論において、ミスリーディングやアンフェアな部分が隠されていたりしないのだろうか。

ためしに『大正新脩大蔵経』の第四巻 [4] を最初から読んでいくと、目次のページに、各経典の著者等が書いてある (図 6)。この巻の最初の経典である「仏所行讃五巻」は、著者が馬鳴 (Aśvaghoṣa, 80?-150?) で、翻訳者が曇無讖 (Dharmakṣema, 385-433) のようだ。本文も同様である (図 7)。一方、奥付には、大量の人名が記されている (図 8)。奥付の最初に大きく書かれているのは、高楠順次郎 (1866-1945) と渡辺海旭 (1872-1933) であり、日本の一般的な図書目録規則であれば、この図書は

> 高楠順次郎、渡辺海旭『大正新修大蔵経』第四巻

というような形で、高楠順次郎と渡辺海旭を author として取ることになるだろう。ただ、それはあくまで目録規則がそういうものだ、というだけのことであって、著作権はまた別の話だと思う。

この『大正新脩大蔵経』第四巻に収録されている各経典の元ネタは、かならずしも明らかになっていない。出版当時に流布していた他の『大蔵経』と比較した場合でも、やはりところどころ文字が異なっていて、特定の元ネタはないのではないかとすら思える。たとえばこの当時、上海で出版されていた『大蔵経』には、返り点や句点はついていないし、注すらほとんどない (図 9)。あるいは、日本国内で出版されていた『大蔵経』では、注はあるが返り点がなかったり (図 10)、返り点はあるが注がなかったり (図 11) していた。なお、『大正新脩大蔵経』第四巻で返り点や句点や注を付けたのは、奥付 (図 8) によれば、干潟竜祥 (1892-1991)、寺崎修一 (1896-1936)、小野玄妙 (1883-1939) である。

では、この『大正新脩大蔵経』第四巻に収録されている「仏所行讃五巻」の著作権は、どうなっているのだろう。原文 (たぶんサンスクリット) を造った馬鳴の著作権は、とっくの昔に切れている。それを漢文に翻訳した曇無讖の著作権も、もちろん切れている。そこに返り点や句点や注をつけた人物については、もしそれが著作権として認められうるとしても、2014 年の現時点では、干潟竜祥だけが存続していて、寺崎修一と小野玄妙は切れている。高楠順次郎と渡辺海旭は、この「仏所行讃五巻」にどう関わったのかがわからないのだが、仮にその著作権があったとしても現時点では切れている。

すなわち、干潟竜祥の著作権がもしあるのなら、それだけが存続していて、他は切れているということだ。そのような状態なので、国立国会図書館としても、とりあえず著作権が存続していそうな干潟竜祥を中心に考えればいいはずなのに、くだんの文書 [1] では、高楠順次郎の著作権のことばかりが書かれている。著作権譲渡登録の問題[‡]があるのかもしれないが、それにしても、どうも、どこかがおかしい。

[‡]高楠順次郎は 1930 年 12 月に、『大正新脩大蔵経』68 冊の著作権を、大正一切経刊行会 (代表: 小野玄妙) に譲渡登録したらしい [8]。

著作権法と「インターネット提供」

本稿で私は、『南伝大蔵経』と『大正新脩大蔵経』のインターネット提供を、著作権法第五十一条第二項の問題として、見てきた。

> 著作権は、この節に別段の定めがある場合を除き、著作者の死後（共同著作物にあつては、最終に死亡した著作者の死後。次条第一項において同じ。）五十年を経過するまでの間、存続する。

しかし、あるいはこの問題を、むしろ、著作権法第三十一条第三項(の前半)の延長線上で扱う、という立場もアリなのではないか、と私には思えてきてしまったりしている。

> 国立国会図書館は、絶版等資料に係る著作物について、図書館等において公衆に提示することを目的とする場合には、前項の規定により記録媒体に記録された当該著作物の複製物を用いて自動公衆送信を行うことができる。

もちろん第三十一条第三項は、図書館向けデジタル化資料送信サービス(2014年1月21日開始[9])に関するものだが、それでも、どうも気になる。この項の「図書館等において」の部分をざっくり消除してしまって、絶版等資料ならインターネットで提供できるようにする、という立場があってもいいんじゃないかと。

第五十一条第二項は、大量の人名が目次や奥付に記されているようなケースでは、ものすごく手間が増えてしまう。本稿のケースが、まさにそれだ[§]。一方、第三十一条第三項は、絶版等で入手困難かどうかさえ調べればいいし、あるいは出版社に申し立ててもらえばいい。悪用を考慮に入れなければ、遥かに楽ちんである。第三十一条第三項をインターネット提供にも適用できうるなら、それは、絶版等資料の「フェアユース」という道に、もしかしたら繋がっているのではないかと、私自身は夢想してしまう。ただ、その夢想を実現するためには、もちろん、著作権法改正という棘の道が待っているのだが。

参考文献

[1] 『インターネット提供に対する出版社の申出への対応について』国立国会図書館 (2014.1.7). http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2013/report140107.pdf

[2] 高楠博士功績記念会纂訳『南伝大蔵経』第四巻: 律蔵四, 大蔵出版, 東京 (1939.2.8).

[3] Hermann Oldenberg ed. 『THE VINAYA PIṬAKAṂ』Vol. II: THE CULLAVAGA, Williams and Norgate, London (1880).

[4] 高楠順次郎、渡辺海旭『大正新脩大蔵経』第四巻: 本縁部下, 大正一切経刊行会, 東京 (1924.7.15).

[5] 頻伽精舎校刊『大蔵経』蔵七, 頻伽精舎, 上海 (1913).

[6] 大日本校訂『大蔵経』蔵七, 弘教書院, 東京 (1883).

[7] 大日本校訂訓点『大蔵経』第二十六套第七, 蔵経書院, 京都 (1904).

[8] 著作権譲渡登録, 官報, 第1183号 (1930.12.6), p.191.

[9] 『図書館向けデジタル化資料送信サービスを開始します』国立国会図書館 (2014.1.10). http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2013/__icsFiles/afieldfile/2014/01/09/pr140110.pdf

[10] 金倉円照: 寺崎修一助教授の逝去, 文化(東北帝国大学文科会), 第3巻, 第5号 (1936.5), pp.653-654.

[11] 会員消息, 駒沢大学仏教学部論集, 第24号 (1993.10), p.360.

[§]実際、私自身も、寺崎修一の没年を調査するために、東北帝国大学の紀要『文化』を順にチェック[10]し、東元慶喜(東元多郎)の没年を調査するために、『駒沢大学仏教学部論集』を順にチェック[11]する羽目になった。

目次

宮本正尊
渡邊照宏 譯

律藏四 小品

大品に續き犍度部の後半を成し十二犍度に分たる。

第一羯磨犍度 …… 一

苦切羯磨・依止羯磨・驅出羯磨・下意羯磨及三種の擧罪羯磨を制定せる因緣とその方法とを說明す。

初誦品 苦切羯磨（一―八）

一〔因緣〕 …… 一

盤那・盧醯の徒の比丘等訴訟等を行ひ不穩當なるによりて苦切羯磨制定せらる。

二 非法羯磨十二事 …… 三

三 如法羯磨十二事 …… 五

四「若し欲せば」六事 …… 六

図 1: 『南伝大蔵経』第四巻 [2] 目次 1 ページ

律藏 小品（チュッラ・ヴッガ）

彼の世尊、應供、正等覺者に歸命す。

第一 羯磨犍度

一―一 その時、佛世尊は舍衛城（サーヴァッティー）、祇樹給孤獨園（ジェータヴァナアナータピンディカ）に住したまへり。その時、盤那・盧醯（パンドゥカ・ローヒタカ）の徒の比丘等は自ら訴訟し鬪諍し爭論し諍論し僧伽に於て諍事をなし、また他の比丘等にして訴訟し鬪諍し爭論し諍論し僧伽に於て諍事をなすものゝ許に到りて言へり、「具壽等よ、汝等、彼の爲に敗らるゝこと勿れ、聲を高くし力めて諍へ、汝等は彼よりも賢能、聰明、多聞、有義なり、彼を畏るゝこと勿れ、我等も亦汝等に黨せん」。爲に未生

図 2: 『南伝大蔵経』第四巻 [2] 本文 1 ページ

南傳大藏經

高楠博士功績記念會纂譯

代表者　文學博士　宇井伯壽
　　文學博士　長井眞琴
　　文學博士　福島直四郎

監修

マスター オブ アーツ
ドクター オブ リテラチュア
ドクトル フィロゾフィー
文學博士　高楠順次郎

翻譯

文學士　阿部文雄
文學士　和泉得成
文學博士　宇井伯壽
文學博士　故荻原雲來
文學博士　神林隆淨
文學士　栗原廣廓
文學士　坂本幸男
文學博士　高楠順次郎
文學士　土田勝彌
文學博士　長井眞琴
文學博士　羽溪了諦
文學士　干潟龍祥
文學士　福島直四郎
文學士　增永靈鳳
文學士　宮田菱道
文學士　山田龍城
文學士　渡邊楳雄

文學士　青原慶哉
文學士　石川海淨
文學士　上田天瑞
文學士　金倉圓照
文學博士　故木村泰賢
文學士　佐藤密雄
文學士　末永眞海
文學士　高田修
文學士　故寺崎修一
文學士　成田昌信
文學士　花山信勝
文學士　友松圓諦
文學士　藤田眞道
文學士　松濤誠廉
文學士　宮本正尊
文學士　山本快龍
文學士　渡邊照宏

文學士　故赤沼智善
文學士　石黑彌致
文學士　小野島行忍
文學士　金森西俊
文學士　久野芳隆
文學士　佐藤良智
文學士　田中於菟彌
文學士　立花俊道
文學士　中野義照
文學士　西義雄
文學士　林平等
文學士　五邦通昭
文學士　梅榮良順
文學士　逸見弘元
文學士　水野梅曉
文學士　山崎智敎
文學士　山本和泉
文學士　吉水得成

編輯

文學博士　小野玄妙
文學士　山本快龍
文學士　渡邊俊英

文學士　蓮澤成淳
文學士　金森西俊
文學士　岡崎密朗

文學士
文學士
文學士

昭和十四年二月五日　印刷
昭和十四年二月八日　發行

第四卷

會員番號

【非賣品】

東京市本郷區本郷三丁目二
大藏出版株式會社
編輯兼發行者　小野玄妙

東京市芝區芝浦一丁目二三
印刷者　森下笑吉

東京市芝區芝浦一丁目二三
印刷所　單式印刷株式會社

東京市荒川區日暮里町八ノ五五
製本所　村田文泉閣

東京市本郷區本郷三丁目二
發行所　大藏出版株式會社
電話小石川六一四一番
六三一〇番
振替東京五一六八四番

図 3: 『南伝大蔵経』第四巻 [2] 奥付

凡例

一、今卷依用の底本は Hermann Oldenberg 刊行本 (London, 1880)にして兼て暹羅版を參照せり。

一、本譯者は前に刊行せる律藏大品と同じく Hermann Oldenberg and Rhys Davids 共譯の英譯律藏及立花俊道氏和譯を參照せり。

一、本文行頭に羅馬數字を以て底本の頁數を附し、彼此參看に便せり。

一、文中〔 〕印を以て括せる語又は句は譯者の挿入せるものなり。

一、文中……或は…乃至…とあるは、底本に然く省略せるものにして〔……〕或は〔…乃至…〕とあるは、譯者が便宜上省略せるものなり。

一、文字の右肩に附せる白拔羅馬數字は註の對照番號にして、註の文は各犍度末に之を出したり。

一、固有名詞の中、その音譯が漢譯律中に存するものは可及的に之を採り巴利

図 4: 『南伝大蔵経』第四巻 [2] 凡例 1 ページ

VINAYAPIṬAKAṂ.

CULLAVAGGA.

Namo tassa bhagavato arahato sammâsambuddhassa.

I.

Tena samayena buddho bhagavâ Sâvatthiyaṃ viharati Jetavane Anâthapiṇḍikassa ârâme. tena kho pana samayena Paṇḍukalohitakâ bhikkhû attanâ bhaṇḍanakârakâ kalahakârakâ vivâdakârakâ bhassakârakâ saṃghe adhikaraṇakârakâ, ye pi c' aññe bhikkhû bhaṇḍanakârakâ kalahakârakâ vivâdakârakâ bhassakârakâ saṃghe adhikaraṇakârakâ te upasaṃkamitvâ evaṃ vadenti: mâ kho tumhe âyasmanto eso ajesi, balavâbalavaṃ patimantetha, tumhe tena paṇḍitatarâ ca vyattatarâ ca bahussutatarâ ca alamatthatarâ ca, mâ c' assa bhâyittha, mayam pi tumhâkaṃ pakkhâ bhavissâmâ 'ti. tena anuppannâni c' eva bhaṇḍanâni uppajjanti uppannâni ca bhaṇḍanâni bhiyyobhâvâya vepullâya saṃvattanti. ||1|| ye te bhikkhû appicchâ te ujjhâyanti khîyanti vipâcenti: kathaṃ hi nâma Paṇḍukalohitakâ bhikkhû attanâ bhaṇḍanakârakâ . . . adhikaraṇakârakâ ye pi c' aññe bhikkhû bhaṇḍanakârakâ . . . adhikaraṇakârakâ te upasaṃkamitvâ evaṃ vakkhanti: mâ kho . . . saṃvattantîti. atha kho te bhikkhû bhavagato etam atthaṃ ârocesuṃ. atha kho bhagavâ etasmiṃ nidâne etasmiṃ pakaraṇe bhikkhusaṃghaṃ sannipâtâpetvâ bhikkhû paṭipucchi: saccaṃ kira bhikkhave Paṇḍukalohitakâ bhikkhû atta-

図 5: 図 2 の元ネタ [3] 本文 1 ページ

目次

一九二　佛所行讚（五卷）……馬鳴菩薩造……北涼　曇無讖　譯……一

（一）生品（一）……一
（二）處宮品（一）……三
（三）厭患品（一）……五
（四）離欲品（一）……六
（五）出城品（一）……八
（六）車匿還品（一）……一〇
（七）入苦行林品（一）……一二
（八）合宮憂悲品（一）……一四
（九）推求太子品（一）……一六
（一〇）瓶沙王詣太子品（一）……一九
（一一）答瓶沙王品（一）……二〇
（一二）阿羅藍鬱頭藍品（一）……二二
（一三）破魔品（一）……二五
（一四）阿惟三菩提品（一）……二六
（一五）轉法輪品（一）……二八
（一六）瓶沙王諸弟子品（一）……三〇
（一七）大弟子出家品（一）……三三
（一八）化給孤獨品（一）……三四
（一九）父子相見品（一）……三六
（二〇）受祇桓精舍品（一）……三八
（二一）守財醉象調伏品（一）……四〇
（二二）菴摩羅女見佛品（一）……四一
（二三）神力住壽品（一）……四二
（二四）離車辭別品（一）……四四
（二五）涅槃品（一）……四五
（二六）大般涅槃品（一）……四七
（二七）歎涅槃品（一）……五〇
（二八）分舍利品（一）……五二

一九三　佛本行經（七卷）……宋　釋寶雲　譯……五四

（一）因緣品（一）……五四
（二）稱歎如來品（一）……五五
（三）降胎品（一）……五七
（四）如來生品（一）……五八
（五）梵志占相品（一）……五九
（六）阿夷決疑品（一）……六〇
（七）入譽論品（一）……六一
（八）興衆婇女遊居品（一）……六三
（九）現憂懼品（一）……六四
（一〇）閻浮提樹蔭品（一）……六六
（一一）出家品（一）……六七
（一二）車匿品（一）……六九
（一三）瓶沙王問事品（一）……七〇
（一四）爲瓶沙王說法品（一）……七二

図 6: 『大正新脩大蔵経』第四巻 [4] 目次 1 ページ

No. 192

❶佛所行讃卷第一 ❷亦云佛本行經

❸馬鳴菩薩❹造

北涼天竺三藏曇無讖譯

❺生品第一

甘蔗之苗裔　釋迦無勝王
淨財德純備　❻故名曰❼淨飯
群生樂瞻仰　猶如初生月
王如天帝釋　夫人猶❽舍脂
執志安如地　心淨若蓮花
假譬名❾摩耶　其實無倫比
於彼❿象天后　降神而處胎
母悉離憂患　不生幻僞心
厭惡⓫彼諠俗　樂處空閑林
⓬藍毘尼勝園　流泉花果茂
寂靜⓭順禪思　啓王請遊彼
王知其志願　而生奇特想
勅內外眷屬　俱詣彼園林
爾時摩耶后　自知產時至
偃寢安勝床　百千婇女侍
⓮時四月八日　⓯清和氣調適
齋戒修淨德　菩薩右脇生
大悲救世間　不令母苦惱
⓰優留王股生　⓱畀偸王手生
⓲曼陀王頂生　⓳伽叉王腋生
菩薩亦如是　誕從右脇生
漸漸從胎出　光明普照耀
如從虛空墮　不由於生門
修德無量劫　自知生不⓴死
安諦不傾動　明顯妙端嚴
晃然㉑後胎現　猶如日初昇
觀察極明耀　而不害眼根
縱視而不耀　如觀空中月
自身光照耀　如日奪燈明
菩薩眞金身　普照亦如是
正㉒眞心不亂　㉓安庠行七步
足下安平趾　炳徹猶七星
獸王師子步　觀察於四方
通達眞實義　堪能如是說
此生爲佛生　則爲後邊生
我唯此一生　當度於一切
應時虛空中　淨水雙流下
一溫一清涼　灌頂令身樂
安處寶宮殿　臥於琉璃床
天王金華手　㉔奉持床四足
諸天於空中　執持寶蓋侍
承威神讚歎　勸發成佛道
諸龍王歡喜　渴仰殊勝法
曾奉過去佛　今得値菩薩
散㉕曼陀羅花　專心樂供養
如來出興世　㉖淨居天歡喜
已除愛欲歡　爲法而欣悅
衆生沒苦海　令得解脫故
須彌寶山王　堅持此大地
菩薩出興世　功德風所飄
普皆大震動　如風鼓浪舟
㉗栴檀細末香　衆寶蓮花藏
風吹隨空流　繽紛而亂墜
天衣從空下　觸身生妙樂
日月如常度　光耀倍增明
世界諸火光　無薪自炎熾
淨水清涼井　前後自然生
中宮婇女衆　怪歎未曾有
競赴而飲浴　皆起安樂想
㉘無量部多天　樂法悉雲集
於藍毘尼園　遍滿林樹間
奇特衆妙花　非時而敷榮
㉙凶暴衆生類　一時生慈心
世間諸疾病　不療自然除
亂鳴諸禽獸　㉚恬默寂無聲
萬川皆停流　濁水悉澄清
空中無雲翳　天鼓自然鳴
一切諸世間　悉得安隱樂
猶如荒難國　忽得賢明主
菩薩所以生　爲濟世衆苦
唯彼㉛魔天王　㉜震動大憂惱
父王見生子　奇特未曾有
素性雖安重　驚駭改常容
㉝二息交胸起　一喜復一懼
夫人見其子　不由常道生
女人性怯弱　悚惕懷氷炭
不別吉凶相　反更生憂怖
長宿諸母人　互亂祈神明
各請常所事　願令太子安
時彼林中有　知相婆羅門

❶佛所行讃＋(經)㊀, Buddha-carita. ❷〔亦云…經〕六字一㊀ ❸Aśvaghoṣa. ❹造＝撰㊀ ❺1 Bhagavatprasūti-sarga;漢譯ニハ原本ノ最初ニアル二十四頌ヲ缺ク ❻故名＝名故㊀ ❼Śuddhodana. ❽Śaśī. ❾Māyā. ❿象＝像㊀ ⓫彼諠＝常諠㊀ ⓬Lumbinī. ⓭順＝樂㊀ ⓮時＝於㊀ ⓯清＝時㊀ ⓰Aurva. ⓱Pṛśa. ⓲Māndhātṛ. ⓳Kakṣīvat. ⓴死＝亂㊀ ㉑後＝從㊀ ㉒眞＝直㊀ ㉓安庠＝庠序宋元安詳明 ㉔奉＝捧元明 ㉕Māndārapuṣpa. ㉖Śuddhādhivāsa. ㉗Candana. ㉘Bhūta gaṇa. ㉙凶＝兇㊀ ㉚恬默寂＝寂默而㊀ ㉛Mārasvatas. ㉜震動大憂惱＝獨憂而不悅㊀ ㉝二息交胸起＝自慮交心懷㊀

図 7: 『大正新脩大蔵経』第四巻 [4] 本文 1 ページ

大正新修 大藏經

マスター オフ アーツ、ドクトル オフ リテラチューア、ドクトル オフ ロソフイエー 文學博士 高楠順次郎

ドクトル フイロソフイエー 渡邊海旭

編輯部

第一校合所（廣、宋、元、明藏）芝增上寺圓藏亭

文學士 石川海淨　文學士 千葉秀胤
文學士 瀧野時之助　文學士 中野義照
文學士 松本德明　文學士 三明永無
文學士 末永眞海　文學士 和田徹城
文學士 大塚道光　文學士 安藤環中
岸宏之

第二校合所（正倉院聖語藏天平寫經）上野帝室博物館

文學士 山本快龍　文學士 近藤隆晃
文學士 西義雄

第三校合所（舊宋版東福寺本）宮內省圖書寮

文學士 山崎精華　文學士 坂本幸男

加點及原語註

文學士 干潟龍祥　文學士 寺崎修一
小野玄妙

編纂排印

菅原法嶽　潮留眞澄
文學士 飯田眞一　野崎慶昌
文學士 八雲圓成　魚津善法
甲藤季雄　山形清馨
文學士 永井忠順　堀尾順我
編纂索隱 小野玄妙

外校訂員七名・校正員五名・索隱補二名・事務五名。

燉煌寫經校合　文學博士 矢吹慶輝
知恩院天平寫經校合　藤堂祐範
醍醐寺萬德寺大德寺天平寫經校合　文學士 和田徹城
高野山龍藏校合　水原堯榮
文學士 蓮澤淨淳

大十三正年六月三十日印刷
大正十三年七月十五日發行

第四卷本緣部下

會員加入順位

（非賣品）

編輯兼發行者 東京市小石川區關口臺町五番地 高楠順次郎

印刷者 東京市麹町區飯田町二丁目五十番地 猪本卓一

印刷所 東京市麹町區飯田町二丁目五十番地 大正一切經刊行會印刷所

發行所 東京市小石川區關口臺町五番地 大正一切經刊行會

電話牛込七八八番
振替東京六三三〇八番
振替長野三三五六番

THE TRIPITAKA IN CHINESE

Revised, Collated, Added, Rearranged and Edited

BY

Prof. J. TAKAKUSU
Prof. K. WATANABE

Published by

THE TAISHO ISSAI-KYO KANKO KWAI
(Society for the Publication of the Taisho Edition of the Tripitaka)
No. 5 Sekiguchi-Daimachi, Koishikawa, Tokyo

（藏瀧木植　本製）

図 8: 『大正新脩大蔵経』第四巻 [4] 奥付

佛所行讚卷第一 亦曰佛本行經

馬鳴菩薩造
北涼天竺三藏曇無讖譯

生品第一

甘蔗之苗裔　釋迦無勝王　淨財德純備　故名曰淨飯　羣生樂瞻仰　猶如初生月　王如天帝釋
夫人猶舍脂　執志安如地　心淨若蓮花　假譬名摩耶　其實無倫比　於彼象天后　降神而處胎
母悉離憂患　不生幻僞心　厭惡彼諠俗　樂處空閑林　藍毘尼勝園　流泉花果茂　寂靜順禪思
啓王請遊彼　王知其志願　而生奇特想　勑內外眷屬　俱詣彼園林　爾時摩耶后　自知產時至
偃寢安勝牀　百千婇女侍　時四月八日　清和氣調適　齋戒修淨德　菩薩右脇生　大悲救世間
不令母苦惱　優留王股生　畀偸王手生　曼陀王頂生　伽叉王腋生　菩薩亦如是　誕從右脇生
漸漸從胎出　光明普照耀　如從虛空墮　不由於生門　修德無量劫　自知生不死　安諦不傾動
明顯妙端嚴　晃然後胎現　猶如日初昇　觀察極明耀　而不害眼根　縱視而不耀　如觀空中月
自身光照耀　如日奪燈明　菩薩眞金身　普照亦如是　正眞心不亂　安庠行七步　足下安平趾
炳徹猶七星　獸王師子步　觀察於四方　通達眞實義　堪能如是說　此生爲佛生　則爲後邊生
我唯此一生　當度於一切　應時虛空中　淨水雙流下　一溫一清涼　灌頂令身樂　安處寶宮殿
臥於琉璃牀　天王金華手　奉持牀四足　諸天於空中　執持寶蓋侍　承威神讚歎　勸發成佛道
諸龍王歡喜　渴仰殊勝法　曾奉過去佛　今得値菩薩　散曼陀羅花　專心樂供養　如來出興世
淨居天歡喜　已除愛欲歡　爲法而欣悅　衆生沒苦海　令得解脫故　須彌寶山王　堅持此大地
菩薩出興世　功德風所飄　普皆大震動　如風鼓浪舟　栴檀細末香　衆寶蓮花藏　風吹隨空流
繽紛而亂墜　天衣從空下　觸身生妙樂　日月如常度　光耀倍增明　世界諸火光　無薪自炎熾

図 9: 図 7 の異本の一つ [5] 四十四乙

首題讚下三本俱有經字同下同無亦曰等六字○撰號造同作撰下每卷同

故名同作名故
象同作像
彼諠同作諠譁
○順同作樂
時同作於○清
同作時
死同作亂
後同作從
眞同作直○安
庠宋元俱作庠
序明作安詳
奉元明俱作捧
隨三本俱作騰
炎元明俱作焰

佛所行讚卷第一 亦曰佛本行經

〔麗據〕〔宋據〕〔元據〕〔明典〕

馬鳴菩薩造

北涼天竺三藏曇無讖譯

生品第一

甘蔗之苗裔　釋迦無勝王　淨財德純備　故名曰淨飯　羣生樂瞻仰　猶如初生月　王如天帝釋
夫人猶舍脂　執志安如地　心淨若蓮花　假譬名摩耶　其實無倫比　於彼象天后　降神而處胎
母悉離憂患　不生幻僞心　厭惡彼諠俗　樂處空閑林　藍毘尼勝園　流泉花果茂　寂靜順禪思
啓王請遊彼　王知其志願　而生奇特想　勑內外眷屬　俱詣彼園林　爾時摩耶后　自知產時至
偃寢安勝牀　百千婇女侍　時四月八日　清和氣調適　齊戒修淨德　菩薩右脇生　大悲救世間
不令母苦惱　優留王股生　畢儉王手生　曼陀王頂生　伽叉王腋生　菩薩亦如是　誕從右脇生
漸漸從胎出　光明普照耀　如從虛空墮　不由於生門　修德無量劫　自知生不死　安諦不傾動
明顯妙端嚴　晃然後胎現　猶如日初昇　觀察極明耀　而不害眼根　縱視而不耀　如觀空中月
自身光照耀　如日奪燈明　菩薩眞金身　普照亦如是　正眞心不亂　安庠行七步　足下安平趾
炳徹猶七星　獸王師子步　觀察於四方　通達眞實義　堪能如是說　此生爲佛生　則爲後邊生
我唯此一生　當度於一切　應時虛空中　淨水雙流下　一溫一清涼　灌頂令身樂　安處寶宮殿
臥於琉璃牀　天王金華手　奉持牀四足　諸天於空中　執持寶蓋侍　承威神讚歎　勸發成佛道
諸龍王歡喜　渴仰殊勝法　曾奉過去佛　今得值菩薩　散曼陀羅花　專心樂供養　如來出興世
淨居天歡喜　已除愛欲歡　爲法而欣悅　衆生沒苦海　令得解脫故　須彌寶山王　堅持此大地
菩薩出興世　功德風所飄　普皆大震動　如風鼓浪舟　栴檀細末香　衆寶蓮花藏　風吹隨空流
繽紛而亂墜　天衣從空下　觸身生妙樂　日月如常度　光耀倍增明　世界諸火光　無薪自炎熾

図 10: 図 7 の異本の一つ [6] 四十四乙

佛所行讚卷第一。[亦云佛本行經]

馬鳴菩薩造

北涼天竺三藏曇無讖譯

生品第一

甘蔗之苗裔　釋迦無勝王　淨財德純備
故名曰淨飯　羣生樂瞻仰　猶如初生月
王如天帝釋　夫人猶舍脂　執志安如地
心淨若蓮華　假譬名摩耶　其實無倫比
於彼象天后　降神而處胎　母悉離憂患
不生幻僞心　厭惡彼諠俗　樂處空閑林
藍毗尼勝園　流泉華果茂　寂靜順禪思
啓王請遊彼　王知其志願　而生奇特想
敕內外眷屬　俱詣彼園林　爾時摩耶后
自知產時至　偃寢安勝牀　百千婇女侍
時四月八日　清和氣調適　齋戒修淨德
菩薩右脇生　大悲救世間　不令母苦惱
優留王股生　卑偷王手生　曼陀王頂生
伽叉王腋生　菩薩亦如是　誕從右脇生
漸漸從胎出　光明普照耀　如從虛空墮
不由於生門　修德無量劫　自知生不死

安諦不傾動　明顯妙端嚴　晃然後胎現
猶如日初昇　觀察極明耀　而不害眼根
縱視而不耀　如觀空中月　自身光照耀
如日奪燈明　菩薩眞金身　普照亦如是
正眞心不亂　安庠行七步　足下安平趾
炳徹猶七星　獸王師子步　觀察於四方
通達眞實義　堪能如是說　此生爲佛生
則爲後邊生　我唯此一生　當度於一切
應時虛空中　淨水雙流下　一溫一清涼
灌頂令身樂　安處寶宮殿　臥於瑠璃牀
天王金華手　奉持牀四足　諸天於空中
執持寶蓋侍　承威神讚歎　勸發成佛道
諸龍王歡喜　渴仰殊勝法　曾奉過去佛
今得値菩薩　散曼陀羅華　專心樂供養
如來出興世　淨居天歡喜　已除愛欲歡
爲法而欣悅　衆生沒苦海　令得解脫故
須彌寶山王　堅持此大地　菩薩出興世
功德風所飄　普皆大震動　如風鼓浪舟
栴檀細末香　衆寶蓮華藏　風吹隨空流
繽紛而亂墜

図 11: 図 7 の異本の一つ [7] 六百二十四乙

附録：『南伝大蔵経』各巻の翻訳者

『南伝大蔵経』の翻訳者を、各巻ごとに以下に示す。没年が判明している場合は、角カッコもしくは丸カッコで付記した。他に情報をご存じの方は、ぜひ私 (安岡孝一) まで御教示いただきたい。

第一巻　上田天瑞 (1974)
第二巻　上田天瑞 (1974)
第三巻　渡辺照宏 (1977)
第四巻　宮本正尊 (1983)　渡辺照宏 (1977)
第五巻　上田天瑞 (1974)
第六巻　宇井伯寿 [1963]　羽渓了諦 (1974)　長井真琴 (1970)　久野芳隆 [1944]　赤沼智善 [1937]　木村泰賢 [1930]　金倉円照 (1987)　荻原雲来 [1937]　坂本幸男 (1973)　花山信勝 (1995)　山田竜城 (1979)　平等通昭 (1993)
第七巻　寺崎修一 [1936]　平等通昭 (1993)　干潟竜祥 (1991)　山本快竜 [1948]　阿部文雄 (1977)　小野島行忍 [1948]　石川海浄 (1969)　水野弘元 (2006)
第八巻　中野義照 (1977)　青原慶哉 [1945]　久野芳隆 [1944]　西義雄 (1993)　成田昌信　逸見梅栄 (1977)　神林隆浄 [1963]　立花俊道 [1955]　渡辺楳雄 (1978)
第九巻　干潟竜祥 (1991)
第十巻　干潟竜祥 (1991)
第十一巻上　青原慶哉 [1945]
第十一巻下　渡辺楳雄 (1978)
第十二巻　赤沼智善 [1937]
第十三巻　林五邦 [1938]
第十四巻　渡辺照宏 (1977)
第十五巻　立花俊道 [1955]
第十六巻上　立花俊道 [1955]　渡辺照宏 (1977)
第十六巻下　渡辺照宏 (1977)
第十七巻　荻原雲来 [1937]
第十八巻　荻原雲来 [1937]
第十九巻　荻原雲来 [1937]
第二十巻　荻原雲来 [1937]　土田勝弥 [1959]
第二十一巻　渡辺照宏 (1977)
第二十二巻上　渡辺照宏 (1977)
第二十二巻下　渡辺照宏 (1977)
第二十三巻　宮田菱道 (1990)　福島直四郎 (1979)　増永霊鳳 (1981)　石黒弥致
第二十四巻　水野弘元 (2006)
第二十五巻　宮田菱道 (1990)　増永霊鳳 (1981)
第二十六巻　高田修 (2006)
第二十七巻　山崎良順 (1996)
第二十八巻　立花俊道 [1955]　長井真琴 (1970)　山田竜城 (1979)　石川海浄 (1969)　山本快竜 [1948]
第二十九巻　栗原広廓 (1977)　長井真琴 (1970)　立花俊道 [1955]　寺崎修一 [1936]　渡辺楳雄 (1978)　青原慶哉 [1945]
第三十巻　立花俊道 [1955]　長井真琴 (1970)　金倉円照 (1987)　高田修 (2006)
第三十一巻　立花俊道 [1955]　石川海浄 (1969)　和泉得成 (1988)　高田修 (2006)　藤田真道 (1987)　寺崎修一 [1936]

第三十二巻　立花俊道 [1955]　青原慶哉 [1945]　山本快竜 [1948]　石川海浄 (1969)
第三十三巻　渡辺楳雄 (1978)　栗原広廓 (1977)　石川海浄 (1969)　山田竜城 (1979)　水野弘元 (2006)
第三十四巻　高田修 (2006)　山本智教 (1998)　平等通昭 (1993)
第三十五巻　高田修 (2006)　山本快竜 [1948]　田中於菟弥 (1989)　立花俊道 [1955]
第三十六巻　立花俊道 [1955]　高田修 (2006)
第三十七巻　高田修 (2006)
第三十八巻　高田修 (2006)
第三十九巻　栗山徳翁　高田修 (2006)
第四十巻　渡辺照宏 (1977)
第四十一巻　渡辺照宏 (1977)　立花俊道 [1955]　松濤誠廉 (1979)
第四十二巻　水野弘元 (2006)
第四十三巻　水野弘元 (2006)
第四十四巻　水野弘元 (2006)
第四十五巻　佐藤良智 (1978)
第四十六巻　佐藤密雄 (2000)
第四十七巻　佐藤密雄 (2000)　末永真海 [1940]　平松友嗣
第四十八巻上　渡辺照宏 (1977)
第四十八巻下　渡辺照宏 (1977)
第四十九巻　渡辺照宏 (1977)
第五十巻　山崎良順 (1996)
第五十一巻　山崎良順 (1996)
第五十二巻　山崎良順 (1996)
第五十三巻　山崎良順 (1996)
第五十四巻　山崎良順 (1996)
第五十五巻　山崎良順 (1996)
第五十六巻　山崎良順 (1996)
第五十七巻　佐藤密雄 (2000)　佐藤良智 (1978)
第五十八巻　佐藤良智 (1978)
第五十九巻上　金森西俊
第五十九巻下　金森西俊
第六十巻　平松友嗣　立花俊道 [1955]
第六十一巻　東元多郎 (1993)　立花俊道 [1955]
第六十二巻　水野弘元 (2006)
第六十三巻　水野弘元 (2006)
第六十四巻　水野弘元 (2006)
第六十五巻　長井真琴 (1970)　水野弘元 (2006)　宇井伯寿 [1963]